

閑谷学校のこと

村山 敏一 *

Toshikazu Murayama

昨年11月の末、確かNHKの夜9時のニュース番組の中だったと思います、岡山県備前市の特別史跡・閑谷（シズタニ）学校にある楷の木の紅葉が生放送で紹介されました。（関西限定かも？）

ここは大きな一對の楷の木が、一つは赤く、もう一つは黄色に色づき、その大きさと艶やかさで有名なのですが、私は楷の木よりも、閑谷学校の雰囲気や生い立ち・歴史が気に入り、時々、一人で出かけています。

私は、平成12年の夏、相生市に赴任しました。

その秋、近くに住む高校時代の友人から、閑谷学校の楷の木の写真が送られてき、「見物」を勧められました。場所も分からないので、仲間に尋ねてみますと、「岡山にある。一見の価値有り」との返事。なんとも味気なく、ちょっとがっかりしたのですが、どうにもこの学校の事が気になり、その冬にぶらっと出かけてみました。

まず目に飛び込んでくるのは、一風変わった門と石塀、そしてその奥に見えるオレンジ色の大きな屋根。目からの入力が終わらぬうちに、今度は、冬の寒さとは違う、凜とした空気に全身が覆われました。これまでの名所旧跡を訪ねた時とは全く違う感覚です。

閑谷学校は、1666年、岡山藩主池田光政公の命より造られた世界最古の庶民のための学校です。1670年に講堂が、1701年に校門（鶴鳴門）と学校敷地を巡る756mの石塀が完成しています。

建物の屋根瓦はオレンジ色に見えるはずで備前焼で葺かれています。

8歳で岡山池田藩の藩主となった幼い光政公は、責任の重さに悩んでいましたが、長じて、儒（孔子・孟子の教えを奉ずる学者）となり、家臣・領民を導くことに思いが至り、以後の藩政を執り行ったといいます。そして、光政公57歳の時、家臣津田永忠（26歳）に、庶民の教育施設（郷学）の建設を命じました。学校完成後は、領内にあった手習所を廃し、この学校に統合しています。1682年、学校の永続を嫡子綱政と永忠に言い残し、光政公は他界しますが、その後、近隣の田畑を学校領とし、それを耕す農民も移住させています。

光政公の思いは、後々の藩主・藩士・領民にも引き継がれていきます。明治維新後の廃藩置県で、廃校の危機に遭遇しますが、元藩士や有志が集まり、私塾、私立中学校として存続、1905年に学校敷地の西側に新校舎が建設され、県営になりました。



楷の木の紅葉

* 西日本事業部 事業部長

残った旧閑谷学校は、1954年に特別史跡に、講堂は国宝に指定されますが、今も県の教育の場として活用されています。

以下、順に建物を紹介しておきましょう。

閑谷神社は、光政公をお奉りし、隣の聖廟には、孔子が奉られています。毎年10月第4土曜日には、孔子の教えを称え奉じる積業（セキサイ）という儀式が執り行われます。一般には、この廟門の前に植えられた一対の楷の木が有名になっています。しかし、ここ閑谷学校の主人公は、何といってもその隣にある講堂だと思えます。質素ですが重厚感のある建物で、庶民のために造ったものとは思えません。最初に訪れた時、私は、何かに引き寄せられるように、まっすぐこの講堂に足が向きました。その時は冬で、講堂の中は人一人いませんでしたが、拭漆で黒光りした床と厳肅な雰囲気は何とも言えず、あの時に感じた心地よい感覚は今も覚えています。夏に訪れた時は、大勢の高校生が漢文の講義を受けており、なんとも清々しい景色でした。

敷地を取り巻く塀も面白い。屋根のない山高のかまぼこ型、実に精巧な石組みで、石塀（セキハイ）と呼ばれ、草が生えない工夫も施されているそうです。

百聞は一見に…より、この雰囲気を一味、味わっていただきたいと思う次第です。



講堂（国宝）

岡山と言えば、日本三大名園の一つ、後樂園を思い出す方が多いと思いますが、この後樂園は、綱政の代に造られ、永忠が造園の指揮を執っています。こども庶民に開放されており、光政・綱政・永忠の繋がり、当時の岡山藩の庶民に対する思いを強く感じることができます。

この時代は、参勤交代に代表される武家諸法度の制定、島原の乱、鎖国令の発布と幕府体制が益々強固になっていった時期であります。もはや武術は無用となり、優秀な官僚が求められた時代、すなわち武断政治から文治政治へ、文化的には元禄時代へと展開して行く変化の時でありました。水戸光圀や保科正之もこの頃の人で、庶民のための多くの事跡を残し、光政公と共に、徳川時代の3名君と称されています。徳川時代265年の中で、多くの名君と呼ばれる人がいたでしょうが、その中で、3名君と称されている人たちが、揃ってこの時代から出ていることは偶然でしょうか？

変革の時代だからこそ、このような指導者が出現することになるのでしょうか？

今、小泉首相は、圧倒的な世論を背景に、自民党の古い慣習・しがらみを、そして先輩・友人をも捨て、自ら信じる改革に邁進しています。私などは独善過ぎると感じるのですが、この世の中はどう変わっていくのでしょうか、また、後世は、小泉首相にどのような評価を下すのでしょうか。興味津々であります。閑谷学校のことを思う時、どういうわけか、小泉首相の事が頭に浮かんで来るのです。



西日本事業部
事業部長
村山 敏一

TEL. 0791-23-3720
FAX. 0791-23-2748